

## 魚以外の食べものをとる ... 植物、そして動物

アイヌ文化では、魚以外にもさまざまな自然のめぐみを得ています。その一部を紹介します。

### 食べていた植物

野草の中で、今でも山菜として人気の高いギョウジャニンニクは「プクサ」と呼ばれ、とても大切な食べ物でした。

あるいは、オオウバユリは「トゥレブ」と呼ばれ、その鱗茎（球根のようなもの）からでんぷんをとり、また、保存食として「トゥレブアカム」を作りました。



オオウバユリ(トゥレブ)の花と、その鱗茎のせんいで作られた保存食「トゥレブアカム(帯広百年記念館: 2)」。

また、コウライテンナンショウ（ラウラウ）の地下茎には毒があるのですが、ある時期になるとその毒が一部に集まるのでその部分だけを取り除き、残りを食用としたといいます。

秋や春先には、ヤブマメ（エハ）の地下にできる豆をほり集めました。

沼では秋に、水面にうかぶ水草のヒシ（ペカンベ）の実をとりました。



ヒシ(ペカンベ)の実を沼で集める。円内がヒシの実(右は皮をむいたもの)。

### 伝統的な狩り

シカ（ユク）は大きく、とくに冬には群れで行動するのでとても大切なえものでした。

動物は食べ物としてだけでなく、その皮、角、骨を道具などの材料として利用できます。

さらに、毛皮や角は和人と交易商品としても重要なもので、これによって木綿の布や鉄器、うるしぬりの器など、アイヌ文化にとって大きな意味をもつ本州の産物を手に入れることができました。

狩りは弓矢やヤリ、あるいはさまざまなワナやしかけによっておこなわれていました。

弓矢による狩りでは、トリカブト（スルク）という草の根の毒をヤジリ（矢の先）にぬっていました。この毒は何種類かあるトリカブトをどのように混ぜ、ほかに何を入れるのかによってききめがちがい、他人には知られないようにしていたといいます。



冬の狩り。(写真:木下清蔵写真資料より 財団法人 アイヌ民族博物館蔵) 円内はトリカブト(スルク)の花。根から毒をとる。

狩りは一人でやる場合もありましたが、何人がチームを組み、指示する人、追いこむ人、しとめる人、と役割を分担しておこなう場合もありました。

ワナには、ひもに動物がさわるとトメがはずれて矢が発射される「アマツポ」というしかけ弓があります。

そのほか、エサをとろうとすると重しが落ちるしかけ、エサをとるためにジャンプすると首が引っかかるような木の又を利用したしかけ、通り道に輪を作っておいて走りぬけようとした動物をとるしかけなどがありました。



復元された、しかけ弓「アマツポ」。(上士幌町・東泉園)